大崎町で活躍しています vol.24

1月25日(日)、大崎町中央公民館にて第5回「世界のともだちサロン」を開催しました。今回のテーマは「書初め」。新しい年の始まりに、自分の願いや目標を文字にする日本の伝統行事です。外国人住民の方にとっては初めての体験となることも多いため、今回は筆の持ち方や使い方からスタートし、それぞれの想いを半紙に表現しました。

漢字を選ぶアドバイスや、綺麗に書く方法を教えたりと声を掛け合いながら、和やかな雰囲気の中で交流を深め、最後には、書いた漢字と漢字に込めた想いを発表しあい、互いの字を褒め合いました。参加者からは「良い一年のスタートが切れた」「定期的にやりたい」といった感想が寄せられました。

「世界のともだちサロン」は、今後も定期的に開催予定です。国籍や言葉の違いを越えて、楽しく交流しながら学べる場へ、次回は2月22日に「節分」をテーマに、恵方巻き作りと豆まきをおこないます。あなたもぜひ参加してみませんか？

多文化共生サポーターを募集しています！
興味のある方は、右の二次元コードから登録をお願いします。

問 企画政策課
共生協働係(221)
「きっかけは、声かけから！」

町の歩み　町史編さんだより vol.19

【お問い合わせ先】
社会教育課　文化公民館係(421)

昭和20年9月4日、関東に次ぎ進駐軍の本土上陸の地となった鹿屋市・高須。その直前に当地の国民学校の校長に任命された新弘(しんひろむ)(1909～2001)という大崎町出身の人物がいました。

旧制志布志中学校から第一師範学校を経て、教育者としての道を歩み、財部国民学校において教頭の職務に従事する中で終戦を迎えましたが、間もなく突然の辞令が下り、進駐という未曽有の事態に直面した地域の学校長として高須へ赴任しました。当時の学校は、地域住民にとって生活の中心的存在であり、その校長には進駐地となる高須の人々の不安や動揺を落ち着かせるという特別な役割が求められていました。その任務を果たすべく全身全霊をぶつけた新氏は、約25年後に自身が体験した敗戦、虚脱、混乱、再建への歴史的動向をまとめた「終戦秘話　昭和の陣痛」を刊行しました。

本書には、高須での出来事はもとより、当時の進駐軍の様子、鹿屋市の取組み、教育行政、戦時下の一場面など、著者ならではの視点を通した様々な情報が記録されています。今回大崎町史を編さんする上で参考になるだけでなく、日本の再生を心から願い、自身ができることに最大限の力を注ぐ姿からたくさんの元気をもらっています。

執筆：古田由香(大崎町史編纂委員)

新弘 著
『終戦秘話 昭和の陣痛』
2014復刻版
高須史談会

大崎町史編纂委員会事務局　内村・吉原(大崎町中央公民館1階　社会教育課)
〒899-7305　曽於郡大崎町仮宿1029番地　☎476-1111(421・422)